学術研究所主催 研究談話会 報告要旨(2)

第6回　研究談話会

日　　時：平成17年12月21日(水) 17：00～18：30
場　　所：大　講　義　室
話題提供：保　坂　和　彦 (児童学科・講師)
話　　題：気高き野人？ 教育するサル？
～野生チンパンジーの真の姿をもとめて～

報告要旨

ちょうど40年前の1965年、東アフリカ、タンガニイカ湖畔マハレ山塊において、日本人霊長類研究チームによる野生チンパンジーの長期継続調査が開始された。以後、文部省などの援助を受けながら調査拠点は維持され、このヒトに最も近い動物に関する知見を発表し続けている。ただし、同様のプロジェクトは、イギリス人女性ジェーン・グドールによる、やはりタンガニイカ湖畔ゴンベ渓流の長期継続調査が先んじており、その調査が始まった1960年が野生チンパンジー調査元年と称される。その後、西アフリカ、ギニアのボッソウ、コートジボアールのタイ森林、東アフリカのキバレ、ブドンゴなどの調査継続調査も加わり、野生チンパンジーに関する知識は飛躍的に向上した。

このような研究が始まることを待ち望んでいた人物が、250年以上前の18世紀フランスにいた。J・J・ルソーである。ルソーは、『エミール』では教育思想、『社会契約論』では政治思想、「むすんでひらいて…」のメロディーでは作曲者として現代日本の保育実践にも影響を与えた傑物であるが、『人間不平等起源論』では人類学の祖と評する見方もある。

古今東西、人間の本性を善と見るか悪と見るか、思想的な対立が繰り返されてきたことは人間学の基本である。中でも17－18世紀の西洋においては、人間の自然状態を「万人の万人に対する闘争」と考えたT・ホッブズに代表される「人間の本性＝悪」とする思想と、理性の所産である文明に毒される以前の人間を「気高き野人 (noble savage)」と考えたルソーに代表される「人間の本性＝善」とする思想が濫立していた。

ルソーは、当時の旅行者が書き残した野生の大型類人猿に関する記述に大きな関心を寄せた。そして、これらの生き物こそ「野性の人」に違いないと考えていたようである。「野性の人」とは、彼の考える自然状態の人である。言葉も持たず、情念にかられることのない無垢な人として描かれる。情念を持たないため、いわゆる「所有」の概念は発生せず、土地も住居も持たず、森を彷徨い、その日を充足する欲求しかなかったとされた。

ルソーはダーウィンより100年前の思想家であり、旧約聖書・創世記に準じ、動物と初めから明確に区別された存在として人間を捉えている。しかし、彼は「野性の人」が自然や動物と対峙して困難を克服していく過程で、知識や器用さを獲得し、他者の存在に気づき、コミュニケーションの必要上、言語を獲得していったと考えている。さらには、資源を所有するという方

法を思いついたところで、人間の不平等が始まったというシナリオである。今から見れば荒唐無稽であるが、論の進め方自体は、現代進化論にも通じるものがある。

結論から言えば、チンパンジーはルソーが期待したような「野性の人」ではない。野生のチンパンジーをつぶさに観察してきた立場から言えることは、彼らは「サルではない。さりとて、ヒトではない」存在であるということである。しかし、その後、この時代にあって、一般の人が野獣とみなしていた類人猿に人間の本性を考える手がかりを期待していたルソーはまさに非凡な思想家といえる。

野生チンパンジーに関する知見を一般に還元していく切り口として、ルソーの「野性の人」と比較するというのは、ある程度有効かもしれない。また、チンパンジーの真の姿が見えてくるにつれ、ヒトとの共通点・相違点が明確化し、人間の本性が思いがけないほど奥深いことが露呈する。以下に箇条書きするが、詳しくは参考文献を参照されたい。

1．ルソーは「野性の人は他者を覚えていることはないし、必要としてもいない」と考えた。動物がお互いの個体認知に基づき、それぞれの種に応じた社会組織を持つことは、チンパンジーを持ち出すまでもなく社会性動物には一般的である。チンパンジーの場合は、優劣順位に基づく不平等な関係が基本であり、さまざまな社会的相互作用により条件的平等を達成し、緊密な相互依存社会に共存していることがわかってきた。
2．ルソーは「野性の人は肉を食べない」と考えた。チンパンジーは果実食を基本とするが、サルや偶蹄類の肉も食べる。また、肉の所有者は、他個体からの社会的な利益（同盟）と引き替えに肉分配をする。
3．ルソーは「野性の人は戦争をしない」と考えた。チンパンジーは隣接集団と敵対し、協同暴力により、相手を殺す場合がある。また、集団内でも「オストラシズム」と呼ばれるオトナ雄の追放現象や「子殺し」がときどき発生する。
4．ルソーは「野性の人は何かの発見や技術の発明をしても、それを次の世代に伝えることはできなかった」と考えた。野生のチンパンジーには、道具使用、ジェスチャーなどに文化的地域変異があり、子どもの側の観察学習により次世代にも伝えられる。
5．ルソーは「野性の人は教育も進歩もなく、各世代はいつも同じ点から出発した」と考えた。新しく獲得した知識を積極的に次世代に伝える「教育」はたしかにチンパンジーにはない。ヒトを「教育するサル」と称するのは、現時点では妥当といえる。

参考文献

伊谷純一郎 1986.「人間平等起源論」『自然社会の人類学』(伊谷純一郎・田中二郎編著)，アカデミア出版会，pp. 349-389.

保坂和彦 2002.「9章 狩猟・肉食行動」「19章 オストラシズム」『マハレのチンパンジー』(西田利貞・上原重男・川中健二編著)，京都大学学術出版会.

西田利貞 1999.『人間性はどこから来たか』，京都大学学術出版会.

ルソー, J. J.（著），原好男（訳）1986.『人間不平等起源論』. 白水社. ［原著1755］

Whiten A. *et al*. 1999. Cultures in Chimpanzees. *Nature*, 399: 682-685.